

歴史を生かしたまちづくり

# 横浜新聞

第17号

平成14(2002)年12月15日発行  
 企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史の遺産編集委員会  
 印刷：印刷法人協会の産業界印刷局印刷  
 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい1-1-1  
 TEL.045-225-6171 FAX.045-225-2172



旧富士銀行横浜支店 写真撮影：米山淳一

## パラッツォ・フジ・ヨコハマの誕生 吉田綱市

(横浜国立大学大学院教授・横浜市歴史の遺産調査会調査委員)

長らくその帰趨が注目され続けてきた旧富士銀行横浜支店の建物に、本格的な保全活用開始までの暫定利用として15のNPOのオフィスが入り再出発することになった。この建物は昭和4年に安田銀行横浜支店として建てられたもので、同時期に全国各地に建てられた同銀行の各支店のうち、小樽支店(現北海経済新聞社屋)、函館支店(旧ホテル・ニュー函館)と共に三つだけの現存例であった。ただし、横浜支店は昭和29年に創建時と同じスタイルで増築されているから、現存最大の規模であったし、函館は改造が著しく、小樽は擬石張りであるのに対して、横浜は改造がほとんどなく、ファサード二面が全部本石張りで、質的にも群を抜いた存在であった。もちろん、安田銀行の支店としてだけでなく、戦前の銀行建築一般の典型例としても非常に貴重であった。また、それがたつ位置も、馬車道と本町通りが交差する意義深いスポットである。すなわち、旧富士銀行の

本町通りの向かいにはかつて三井組が店出していた、斜向かいにはつい10年ほど前まで横浜銀行本店別館(元第一銀行横浜支店)があった。要するに、この場所はメインストリートが交差する日本人町のうちで最重要の場所であり、それゆえに金融機関が集積していたのである。

この建物の外観は、増築部を除く馬車道側と本町通り側はどちらもまったく同じ意匠で、ルスティカと呼ばれる粗石を積んだ壁の中央に4本の大オーダー(複数の階を通して立つ柱)の四分の三円柱を配している。ただし、馬車道側のほうが全体の幅が少し広い。増築部は、全面ルスティカ仕上げとなっている。ところで、この円柱のオーダーの種類であるが、これが悩ましい。かつては、あまり深刻に考えずにトスカナ式と思い込んでいた。柱頭にさしたる装飾物がないのでトスカナ式でもドリス式でもどちらでもよいようなものだが、柱礎がないし、下部の直径と柱高の比が、ヴェニョーラがドリス式の比例とする1:8ほ

どで、これはドリス式としたほうがよいように思うようになった。設計は安田銀行営繕課で、施工は大倉土木(現大成建設)だということはわかっていたが、最近、当時の安田銀行営繕組織の内容が少しわかった。技師の吉田富次(大正4年東京高等工業建築選科卒)の下に、岡田隆吉、金子由次、佐本謹三、志田完一、渋谷唯男といった人たちがいたのである。

この建物の閉鎖が平成12年12月、横浜市のものとなったのが富士銀行がみずほ銀行となる直前の平成14年3月。そして増築部がNPOのオフィスとして使われるようになったのが同年10月。ヨーロッパの歴史的な建物の名は、その建物の履歴と関わる重要な名称を並べてつけることがある。パラッツォ・メディチ・リッカルディ、パラッツォ・キジ・オデスカルキ、シャトー・ド・メゾン・ラフィットがその一例。その伝でいくと、この建物はパラッツォ・フジ・ヨコハマとなるだろう。



# 古くて新しい道 日本大通り

鈴木伸治

(関東学院大学専任講師・横浜市歴史的資産調査会調査委員)

2002年5月に日本大通りがリニューアルされた。それまでの車道22m、歩道7mという構成から歩道を拡幅し、歩道と植樹帯13.5m、車道9mという構成になり、段差を極力抑えた歩行者にやさしい道へと変身した。皆さんご存知のとおり、日本大通りはR.H.ブランドンにより明治12年に計画整備された日本で初めての西洋式の街路である。居留地時代は外国人町と日本人町を分ける街路であり、また県庁や商工奨励館(現横浜情報文化センター)など重要な施設の立ち並

ぶ堂々たる街並みが形成されてきた。今回の整備は関東大震災後に変更された道路プランをブランドン時代の空間構成に戻す整備であり、ある種先祖がえりのようなもので古さ=歴史を活かした道路整備である。

しかし、今回の整備はこれまでの日本の道路にない「新しさ」を求めたものであるといえる。ヨーロッパの大都市を訪れると必ずといっていいほど、オープンカフェがあり、人々がストリートライフを楽しんでいる光景を目にする。日本でも昨今オープンカフェがブームであり、雑誌で特集などが組まれたりするが、こうしたカフェは海外のものとは根本的に異なるものである。日本では法的な縛りから歩道上にベンチを置くことさえ容易ではなく、したがって、オープンカフェと日本で呼ばれるものは基本的に私的な空間の中でオープンな状態を作り出しているに過ぎず、まちの風景の一部となっていない。日本大通りでは、イベントなどでも利用できるように車止めを可動式とするなど、にぎわいの舞台となる道づくりをめざしている。ま

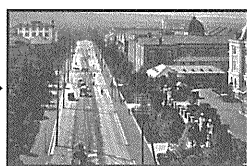
た、ワールドカップのイベントとしてオープンカフェ実験が行われるなど、ハード整備のみならず、いかに使いこなすかというソフト面での検討も進められているようであり、新しい道のあり方が模索されている。

このように道の歴史を活かしながら、新たな視点で整備された「古くて新しい」日本大通りであるがまちづくりの観点から見ると、未完成な道であるとも言える。この道は日本で初めての本格的な西洋式公園である横濱公園と横浜に作られた最初の波止場である象の鼻地区を結ぶ道路である。現在は通りの突き当たりである象の鼻地区へとダイレクトに立ち入ることはできないが、将来象の鼻地区の整備が進めば、横浜公園と象の鼻地区をダイレクトに結ぶ非常にストーリー性のある道路となるわけである。スタジアムで野球やコンサートを楽しみ、日本大通りのオープンカフェで話の花を咲かせ、そして港の風景を楽しむという、まちの魅力を満喫できる横浜を代表する道として完成する日が楽しみである。

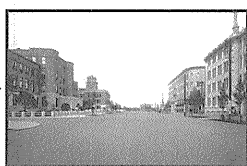
## 明治から今 - 日本大通りの変遷 -



明治の日本大通り



震災前の日本大通り



震災復興後の日本大通り



整備前の日本大通り



整備後の日本大通り

### 「日本大通りパサールカフェ&ギャラリー2002」開催

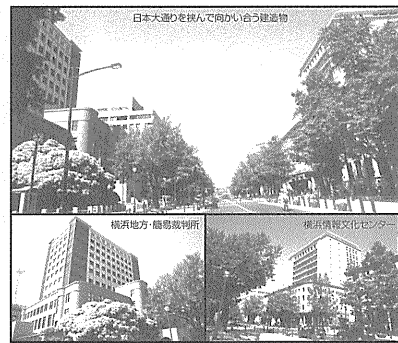
平成14年5月25日から6月2日にかけて、日本大通りのリニューアルとワールドカップサッカー開催を記念して、「日本大通りパサールカフェ&ギャラリー2002」が開催された。中央部の歩道にはその空間を活用して、オープンカフェやフラワーショップ、パサールギャラリーが並び、週末には野外演奏会などが催された。イベント来場者の方へのアンケートでは、雰囲気良かった、今後も続けて欲しい、といった意見が大半を占め、多くの人々がこのイベントを楽しんだ。



オープンカフェ

### 横浜情報文化センターと横浜地方・簡易裁判所 横浜市長より表彰

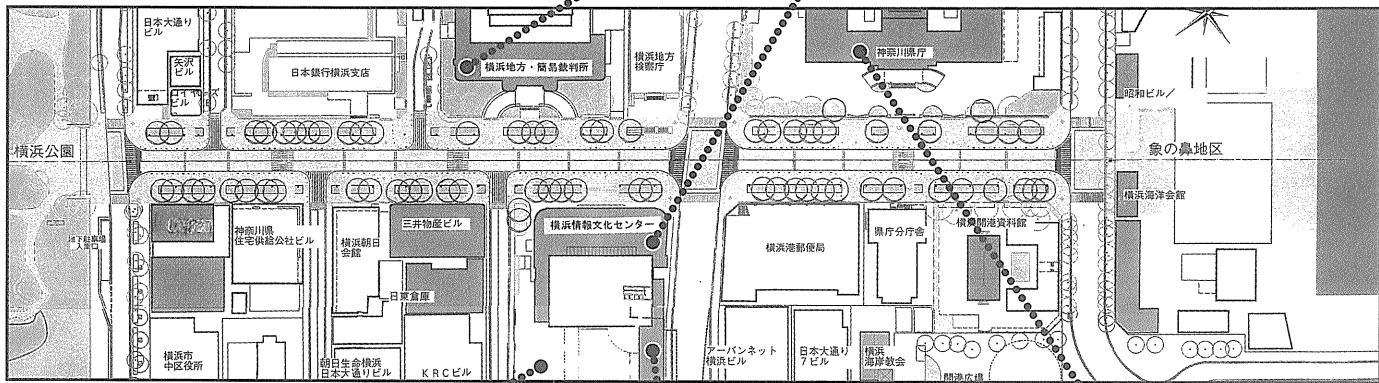
「第2回横浜・人・まち・デザイン賞」の受賞作品がさる7月10日に発表となり、横浜情報文化センターと横浜地方・簡易裁判所が横浜市長より表彰された。この賞は、地域の個性を生かし魅力ある都市景観形成に寄与しているまちなみを構成する建築物等を顕彰するもの。表彰理由は「歴史的建造物を保存活用した二つの建物が日本大通りを挟んで向かい合うことにより、横浜の歴史性と調和した景観をつくりだしている。」今回の顕彰によって、日本大通りの代表的な歴史的建造物としてさらに魅力あるまちづくりに寄与するであろう。【横浜情報文化センター(旧横浜商工奨励館)】商工業界の復興を図る目的で建設された歴史的建造物。これを保存し高層棟が新築され横浜情報文化センターとして平成12年3月に竣工。【横浜地方・簡易裁判所(旧横浜地方裁判所)】旧庁舎は戦前横浜の官庁建築の代表作。新庁舎建設に伴い旧庁舎で使われた石材を再利用し当時の外観を復元した低層棟が高層棟を取り囲んだ形で平成13年6月に竣工。



日本大通りを挟んで向かい合う建造物

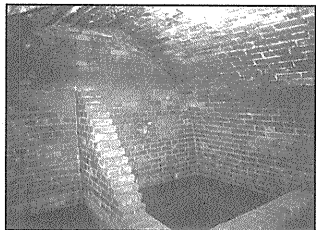
横浜地方・簡易裁判所

横浜情報文化センター



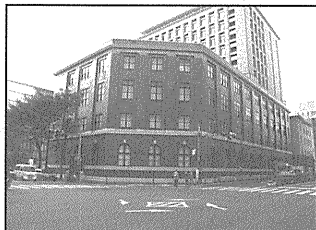
### 旧居留地消防隊地下貯水槽

幕末期から居留地消防隊の本拠となった近代消防ゆかりの地に現存する明治26(1893)年築造の煉瓦地下貯水槽。ヴォールト(かまぼこ型)構造を持ち内部は4室に区画され、常に地下水により貯水されている。横浜市により、保存展示工事が計画されている。



### 横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館

横浜市認定歴史的建造物となっている旧市外電話局を活用した文化施設を整備中である。都市発展記念館では、主に開港期以降における横浜の都市形成の歴史資料を展示し、横浜ユーラシア文化館では、ユーラシアの文化に関する資料の展示や調査研究の結果を公開する。



### 神奈川県庁本庁舎屋上からの展望良好

神奈川県庁本庁舎の屋上を一般に開放していることは、まだあまり知られていないようである。あがってみるとすばらしい景色に驚かされる。左手には赤レンガ倉庫、大棧橋ターミナル、右手遠くにはベイブリッジが見える。眼下に目を移すとももちろん日本大通りを見下ろすこともできる。地上からの眺めとは一味違ったこの景色、空に一歩近づいた所から見てもう一見の価値がある。(平日9:00~17:00)1階保安室にお申し出ください。



## 横浜市歴史的建造物に

### 赤レンガ倉庫ほか4件を認定

認定件数は59件に

横浜市では、昭和63年度に「歴史を生かしたまちづくり愛綱」を定め、平成13年までに55件の歴史的建造物を認定し、歴史的景観の保全を図っている。平成14年に4件を認定し、認定件数は59件となった。

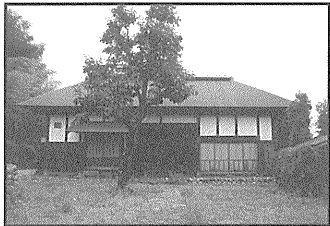
### 赤レンガ倉庫

日本に現存する最大級の煉瓦倉庫。2棟のうち1号倉庫は大正2(1913)年に、2号倉庫は明治44(1911)年に竣工した。この建造物は、近代港湾発祥の地であるみなとみらい21新港地区の歴史的景観を形づくる中心的な施設となっている。

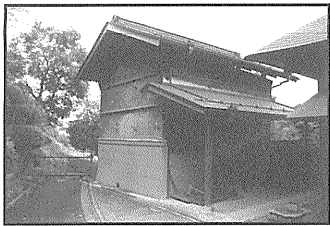


### 旧奥津家長屋門並びに土蔵

新治市民の森入口に位置し、周囲には緑豊かな山林や水田のある谷戸など、かつての農村の原風景が残っている。長屋門は江戸時代末期に、土蔵は大正15(1926)年に建造された。



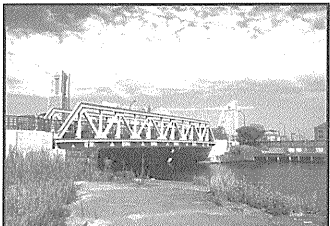
旧奥津家長屋門



土蔵

### 新港橋梁

新港橋梁は、旧横浜臨港鉄道線が横浜税関を経て大さん橋に至るため、大正元(1912)年に建造されたものである。汽車道の港一、二、三、号橋梁とともに近代港湾の輸送システムの一部を示している。



### 日産自動車株式会社横浜工場1号館

(日本社ビル)

横浜を発祥の地とする日産自動車の日本社ビルである。昭和9(1934)年の竣工で、機能優先のシンプルなデザインであるが、創建当時の面影がよく残されており、京浜工業地帯の発展を物語る戦前の貴重な遺構である。



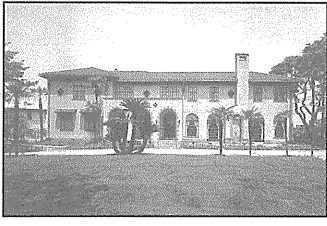
## ベーリック・ホール

### 一般公開好評

横浜市認定歴史的建造物「ベーリック・ホール」(平成13年度認定)の改修工事が平成13年7月から着手されていたが、平成14年3月に竣工し、7月1日から一般公開されている。

ベーリック・ホールは、横浜ゆかりのアメリカ建築家、J.H.モーガンの設計により昭和5年に建設された。現存する山手外国人住宅の中では最大規模を持つスパニッシュ・スタイルの西洋館で、当初はフィンランド名誉領事も務めたB.R.ベリックの邸宅であった。その後、セント・ジョセフ・インターナショナルスクールの寄宿舎として使われていたが、廃校ともない横浜市が取得した。

7月から10月までの4ヶ月間に1万6千人の人が訪れ人気を博している。



## 旧富士銀行横浜支店

### 見学会報告と市民活動共同オフィス開設

旧富士銀行横浜支店は、本格的な保全活用が始まるまでの間、一部を市民活動共同オフィスとして活用することになった。これに先立ち、平成14年8月31日日本建築家協会主催(横浜市歴史的資産調査会後援)により、見学会を開催した。当日は、100人近い参加者を集め、講師の横浜国立大学の吉田綱目教授が建物の特徴を解説しながら外観から内部、そして屋上まで見学した。その後、9月から改修工事に入り、10月10日に様々な分野で活動する市民団体の拠点となる「市民活動共同オフィス」がオープンした。

入居する15団体は、ここを事務所として使いながら、公益的な市民活動と行政の協働のあり方などについても検討していく。

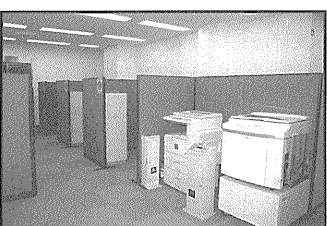
オープニングの挨拶で中田宏市長は「市長就任以来、民の力が発揮できる社会を語ってきた。それを大いに発揮できるのがこの場所です」と祝辞を述べた。

なお、1階ホール部分(金庫室)は、一般にも公開されている。

(年末年始を除き無休・無料・予約不要、問い合わせ先:横浜市都市デザイン室 TEL.045-671-3850)



見学会の様子



市民活動共同オフィス



オープニングでの中田宏市長

## 旧柳下家住宅と

### 旧小岩井家住宅が

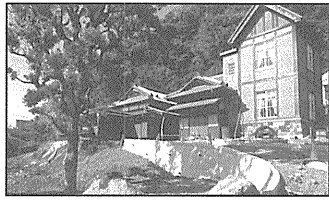
### 市指定文化財に

平成14年11月1日付けで、旧柳下家住宅と旧小岩井家住宅が有形文化財(建造物)に指定された。

旧柳下家住宅は、関東大震災前の大正中期に創建された近代和風住宅で、いわゆる洋館付き和風住宅の規模・質の両面において横浜を代表する建物である。明治後期以降、住宅・別荘地として発展した磯子区の歴史を雄弁に語る貴重な建造物であり、斜面緑地を含む敷地全体を根岸つつかし公園として整備中。

旧小岩井家住宅は、江戸時代末期頃に建てられた古民家で、主屋は一部厨子二階とした多室間取り、式台を付けた縦3室の客座敷を設け、小壁を朱の色壁としたり跳ね上げ壁を用いるなど、一般の農家には見られない造りである。米区中野町に整備されている本郷ふじやま公園内に名主の格式を示す長屋門形式の表門とともに近隣から移築・復原された。

12月14日(土)~1月13日(月)の間、横浜市歴史博物館で行われる横浜市指定・地域文化財展において、これらの建物もパネル展示されている。



旧柳下家住宅



旧小岩井家住宅

## 横浜市認定歴史的建造物

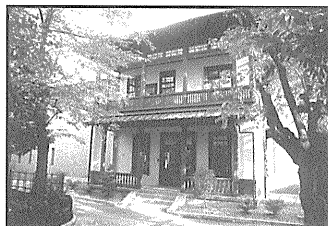
### 横浜市長より表彰される。

第2回横浜・人・まち・デザイン賞のまちなみ景観部門に2面で紹介したものの他、横浜市認定歴史的建造物2件が表彰された。表彰理由は次のとおり。

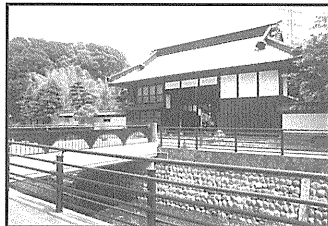
【カトリック横浜司教館】:歴史的建造物の移設保存による有効活用と、敷地内にあるカトリック山手教会聖堂や隣接してあるカトリック横浜司教館別館とともに連続した魅力ある歴史的景観をつくりだしている。

【中丸家長屋門とその周辺】:所有者の歴史的建造物への保存活用に合わせ、河川改修や広場整備などが一体となり、新たな魅力的な空間をつくりだしている。

まちに歴史の香りを伝え、今回の顕彰によってさらに価値あるものになるであろう。



カトリック横浜司教館



中丸家長屋門

## フェリス女学院中・高等部

### 1号館の改築工事が竣工

平成12年10月から改築工事を行っていた山手のフェリス女学院中・高等部1号館が竣工し、平成14年9月14日に奉獻式が行われた。

旧建物は、震災復興により昭和4年に建設された鉄平石張りの外観が特徴的な建物であった。今回工事では、全面的に建て替えが行われたが、山手本通り沿いのファサードが復元され、歴史的景観が蘇った。また、旧講堂にあったステンドグラスも新しい建物に移設されている。



## 歴史を生かした

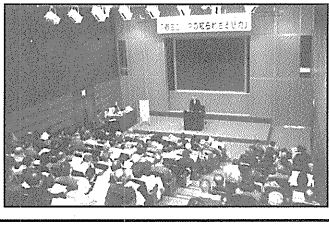
### まちづくりセミナー24

### 「港ヨコハマの知られざる魅力」開催報告

平成14年3月3日(日)第24回歴史を生かしたまちづくりセミナーが横浜市と横浜市歴史的資産調査会の共催で開催された。

今回のセミナーは平成10年度に歴史的建造物として認定され、12年10月にオープンした横浜情報文化センター内のホールで講演会が行われ、133名の参加があった。講師として土木近代化遺産の専門家である関東学院大学教授宮村忠氏と「都市の記憶」シリーズの写真でも知られる写真家の安川千秋氏を迎え、土木遺産やそれらが多く残る「港ヨコハマ」の魅力について講演が行われた。

講演会終了後、日本大通りから前日にオープンした山下臨港線プロムナードを経て赤レンガ倉庫まで「開港の道」沿いの見学会が行われ、自由参加にもかかわらず多くの参加者を得て盛況であった。



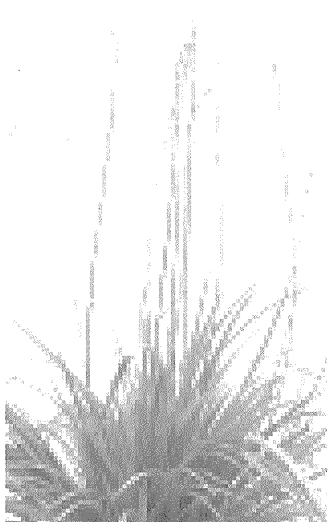
## 都市の記憶シリーズ

### 改訂版発行

横浜市歴史的資産調査会が「都市の記憶シリーズ」の改訂版を発行した。今回改訂されたのはまず「横浜の土木遺産(H14.3発行)」で、内容を見直し写真も一新。続いて改訂したのが「横浜の主要歴史的建造物(H14.6発行)」こちらも新たな認定歴史的建造物を加えグレードアップ。

またワールドカップ期間中に配布するため英語版も発行(非売品)した。

いずれも横浜役所1階市民情報室、有隣堂各店等で販売中。(非売品は市民情報室で閲覧できます)

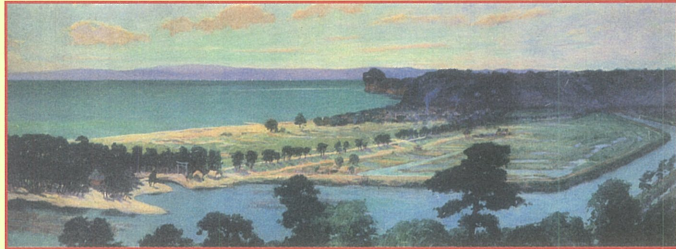




# 描かれ、語られたミナト 宮野力哉 (美術エッセイスト)

150年前、たった4杯の上喜撰で、太平の眠りからゆり起こされた。国を開け、港を開けと、ペリー率いる黒船艦隊の来航。“とま屋の煙 ちらりほらりと立てりし処”に、ミナトが見つられた。安政6(1859)年6月2日、横浜開港。ひなびた一寒村は、日本の表玄関になった。さまざまな人びとやモノが上陸した。さまざまな人が船出していった。ミナトを多くの人が描き、語った。そのほんの一例を見てみよう。

## ◎はじめて外国人が上陸した



① 和田寛作画「開港前の横浜村」横浜開港記念館蔵

●嘉永7(1854)年1月28日、黒船艦隊のアダムス参謀長とサスケハナ号のブカナン艦長は、通訳のウイリアムズとともに横浜村に上陸した。「土地はよく耕作されているが、住家は貧弱なものであった。村の道端には、下肥や、堆肥や、その他肥料になるものを混入し、蒸発しないように藁で蓋をした大桶がたたくさん並べられていて、独得の匂いを漂わせている。家屋はそのほとんどが梁、横木の骨組と泥土の壁、藁とできていて」とウイリアムズが書いた(『ペリー日本遠征随行記』洞富雄訳)。

①図はその頃の風景。右上の黒っぽい丘が山手、左に本牧の岬、遠く房総の山並みが見える。左ななめに白い海岸線、左端のこんもりとした森が弁財天社。この細長い部分が砂州で、うすうすとケムリを上げるのが横浜村。彼らは2隻のボートでここに上陸した。砂州の右側、水たまりがあちこちにあり、泥沼のようなところが埋め立て地太田屋新田。

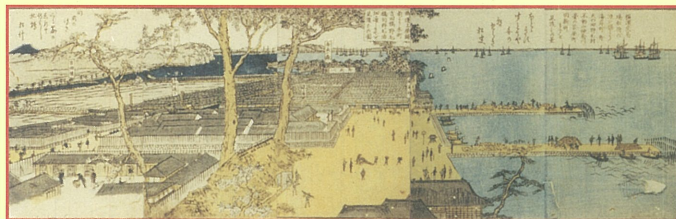
## ◎ペリーの上陸



② 図：ハイン画「ペリー提督横浜上陸」横浜開港資料館蔵

●2月9日、ペリーにとって久里浜と二度目の日本上陸である。艦隊の士官は青い将校服に青い正帽、サーベルと腰にピストル。水兵は青いジャケツに、赤いモールの白いズボン、そして銃剣を持った。11時半、500名が乗り込んだ27隻のボートは、ヨコ1列に並んで岸に向かった。上陸した水兵はまん中を広く開け、整列した。12時、17発の礼砲がとどろき、ペリーは旗艦ポーハタン号からボートに乗り移った。軍楽隊が演奏するなかを着岸、横浜村に上陸。ペリーを先頭に、将官の列が応接所に向かった。その場面が②図で、艦隊の随行画家ハインが描いた。威儀をただした武士たちが出迎えている。水兵の列のうしろに日本人がぎっしり、横浜村の村人だろうか。「星条旗はなま暖かい微風にはためいた。提督が日本の土を踏み、われわれの間を進むと、隊員は捧げ銃をし、軍旗は下げられ、軍楽隊は“ヘイル・コロンビア”の国歌を奏した」とハインは書いた(『ハイン世界周航日本への旅』中井晶夫訳)。沖に艦隊、ミナトの設備はどこにもなく、ただ浜辺のみ。右端の大きな樹木は、いま横浜開港資料館の中庭に繁る玉楠の木である。

## ◎波止場ができた



③ 図：五雲亭貞秀画「山手方向から見た波止場と横浜町」【横浜土産】より 横浜開港資料館蔵

●初代駐日イギリス公使オールコックは、開港直前の5月、横浜に到着した。「サザンブトン号が投錨すると、わたしはすぐに上陸したが、日本政府がひじょうに早手回しに建てた費用のかかったすばらしい花崗岩の建造物には、驚かざるをえなかった。大きな幅の広い突堤が湾のなかに突き出ていて、長い階段がついており、二十隻ものボートが、同時に客や貨物をおろせるほどだった。すぐ正面には、役所風の大きな建物があり、税関(運上所)だと教えられた」(『大君の都』山口光朗訳)と。最初の港湾施設の描写である。③図の手前が東波止場。外国人の上陸や外国からの貨物専用。向こう側が西波止場で、国内の貨物専用であった。「長さ六拾間、幅拾間の石垣にて、水上壹丈三尺、此上へ芝土手高さ五尺」と記録がある。長さ108m、巾18m、高さ3.9mになるが、はたしてそんなに高さがあったのだろうか。といっても、入港した外国船は接岸できず、沖に停泊して、船客も荷物もボートやハシケで波止場に向かった。

## ◎ゾウの鼻ってなに?



④ 図：三代広重画「横浜海岸通之図」横浜開港資料館蔵

●④図の中程に日の丸がたつのは、運上所上屋という税関業務の建物。後ろの3本の塔屋はイギリス領事館、ここに現在は横浜開港資料館がある。左に海岸通り、外国商館が立ち並んでいる。手前の左右にカニのツメのようなふたつの波止場。

画面に納めるため極端に短く、曲げて、小さく描かれてしまった。右は西波止場、左は東波止場。開港直前に完成したふたつの波止場は、平行して垂直に海に延びていたが、慶応2(1866)年、東波止場が西波止場に向かって、ぐーっと曲げて延長された。船まりの波よけのためである。いつしか親しみをこめて“ゾウの鼻”といわれるようになった。現在の大栈橋に入ってすぐ左側、古びた石積み突堤がゾウの鼻。歴史的な土木遺産である。

## ◎長い長い鉄の栈橋

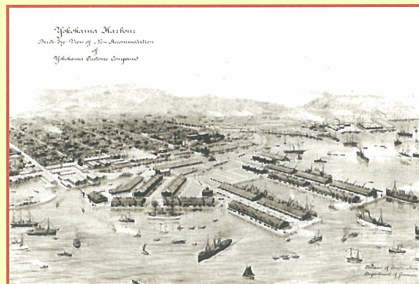


⑤ 図：山本松谷画「乗客船内上るの図」【風俗画報】増刊「郵船協会」より 横浜マリタイムミュージアム蔵

●大栈橋の前身は明治27(1894)年、東波止場の場所に建設された。鉄製の栈橋で「鉄栈橋」といった。この栈橋について頼島外は「鉄橋」に、「鉄橋が長い長い。四筋の軌道が、縦に斜に切つてある鉄橋の梁に、長い桁と短い桁とが、子供のおもちゃにする木琴のやうにわたしてある。靴の踵や下駄の歯を噛みさうな桁の隙から、所々に白く日光を反射してある黒い波が見える」と書いた。西波止場の4倍

以上もの長さで457m、巾19mであった。軌道とあるのは、栈橋のうゑに敷かれたレールのこと。 鵜外がドイツへ留学したのは明治17(1884)年、ハシケで沖に錨を下ろすフランス船に乗船した。4年後、帰国したときもハシケでゾウの鼻に上陸した。それに比べて、鉄栈橋はおどろきであった。4000ト級の船6隻が同時に横付けできる、はじめての近代的な施設。船客は栈橋から直接乗り込み、上陸もできた。⑤図をどうぞ。木琴のように並べられた板、レールも見える。鵜外はつづける。「鉄橋が長い長い。右にも左にも大きい船が着いて居る。黒く塗つたものもある。褐色に塗つたものもある」

## ◎新しく古い



⑥ 図：「YOKOHAMA HARBOUR」 横浜開港資料館刊「20世紀初頭の横浜」より

●司馬遼太郎は「ここは、新港埠頭」、「新港といってもこの埠頭は明治二十三年の着工で、途中、何度も財政難で工事の空白期があり、大正三年になってやっと完成した。つまり大正初年での新で、いまはローマの石造遺跡をみるように古び」と、「街道をゆく」に書いた。⑥図は明治43年に設計された完成予想図。図に見える赤レンガ倉庫について三島由紀夫は、「ふしぎな街だった。清潔すぎる街路、枯れたプラタナスの並木、乏しい人通り、古風な赤煉瓦の倉庫」「倉庫の古い赤煉瓦はあざやかな朱を流した」と、「午後の曳航」に書いた。三島の取材は昭和37(1962)年。2年後、東京オリンピックで来航した各国の豪華客船5隻が大栈橋に横付けして、船がホテルになった。

## ◎朝の横浜港



⑦ 図：斎藤瀧三画「朝の横浜港」

●⑦図はオリンピックに備えて、整備工事中の大栈橋周辺。赤と黒の帯をまいた煙突、白いヨーロッパ客船、ほのかに赤みがさしてきた朝の空。画家は海岸通りで水彩の筆をにぎった。